

東京バッハ合唱団 月報

[第551号] 2008年5月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.551

May 2008

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「復活」と「永遠の生命」への希望

「私の生命」と 大いなるいのち

上村 静

「復活」という表現にはさまざまな意味内容を含むことができるが、本稿では古代ユダヤ教においてどのように「復活」思想が生じてきたのか、またそれとの関連においてキリスト教における「復活」および「永遠の生命」の希望がなにを内包しているのかといったことについて考察してみたい。

1 古代ユダヤ教における「復活」思想の誕生と展開⁽¹⁾

ヘブライ語聖書(いわゆる「旧約聖書」)には、「冥府」を意味するシェオルという語が65回用いられており、冥界の存在は前提とされている。口寄せや霊媒を訪れることの禁令があり⁽²⁾、またサムエルは死後口寄せによって呼び出されたりもするので(サム上28章)、冥界についての様々なイメージはあったはずである。またエゼキエルは、枯れた骨に肉が付いて復活するイメージをイスラエルの再興と重ね合わせて描いており、復活思想を知っていたはずである(37の1-14)。それにもかかわらず、聖書においては死後の世界や個人の復活についてはほとんど言及されない(後述のダニエル書を除く)。聖書は天界や冥界についての想像を逞しくすることについて非常に抑制的である。古代イスラエル人・ユダヤ人も個人レベルでは死後の運命についてさまざまなイメージを持っていたであろうが、聖書記者は個人ではなく民の存続に関心を集中させている。個人は民の中であって生き、死後も民の存続をとおしてそのいのちを昇華させるのである。それは個人を民の一部と見なすものであり、民族主義的・全体主義的であるが、同時にまたひとりの人が独りで生きているわけではなく、他者 ここでは民の構成員とその民を在らしめる神 とのかかわり合いの中で生かされ、またそれゆえに他者を生かす存在でもあるという認識を表している。

死後の靈魂の存続と終末時の裁き

ところが、ギリシャ時代に入ってヘレニズム文化がパレスチナに浸透すると、民の一体性に揺らぎが生じた。保守派を任ずる者の中にはセクトを形成し(エノク派)、自分たちを「義人」とし、ヘレニズム文化になびいていくユダヤ人を「罪人」と断罪する者も現れた(前3世紀)。しかしいくら自分たちこそ「義人」だと言っても、必ずしもそれにふさわしく扱ってもらえるわけではない。そこで彼らは死後の靈魂の存続と終末時の裁きという考

えを導入した(1エノク22章)。それによると靈魂は死後、その生前の振る舞いとその死に方に依りて4つの窪地に集められるという。自然死を迎えた「義人」は「光のきらきらする水の泉の中」で安らぐが、暴力的な死を遂げた「義人」は裁きの日まで告発し続ける。此岸で罰せられずに自然死を迎えた「罪人」は死後の世界においてすでに「悲痛」の中におかれ、さらに終末時に裁かれ、そのあと永遠の苦しみを受ける。此岸で罰を受けた「罪人」は死後の世界でもはや罰せられないし、裁きの日にも罰せられることはないが、暗い冥府に留めおかれる。こうした考えは、この世で思い通りの報いを得られないという怨恨を死後の世界における運命の逆転として期待するものであり、ルサンチマン 現実における怨恨を夢想において晴らす心性 の表現である。それゆえ、たんに死後の靈魂不滅の希望だけでなく、終末時の裁きが語られるのである。

ユダヤ教弾圧下、「復活」思想に結実

前2世紀に入りアンティオコス4世がシリア王に即位すると、パレスチナで大祭司職継承争いが起こる。これによってユダヤ人内部は親ヘレニズム派と反ヘレニズム派に二分されてしまう。この頃エノク派は死後の運命についてより単純化した見解を示している。すなわち、「罪

後援会員・団友、月報ご愛読の皆様

来る7月の合唱団創立記念懇親会で、<地獄と天国>のお話をねがいである上村静氏に、前もってそのヒントとなるような解説を月報紙上にいただきたいとお伝えしましたところ、『福音と世界』に発表された新稿からの転載を取りはからってくださいました。これをゆっくりお読みいただき、当日に、みなさまの日ごろの疑問・関心などを向けてくださるならば、きっと充実した話し合いが展開されることでしょう。

みなさまのご参加をお待ちいたします。

合唱団創立46周年記念懇親会

[日時] 7月7日(月) 18:30 - 20:30

[会場] 目白聖公会 [会費] 1000円(軽食代とも)

参加ご希望の方は事務局までお申し込みください。また、会場までの交通等も、お問い合わせください。ご案内を申し上げます。

人」の魂は黄泉に引き下ろされ、炎の裁きを永遠に受け、「義人」は「空の光のように輝く」という(1エノク 103～104章)。さて、親ヘレニズム派はアンティオコス王を唆し、ユダヤ教禁令を発令させる(前167年)。ユダヤ的生活実践者は死刑に処された。律法に従うと処刑されてしまうという事態は苦難の神義論を提示した。神の義はどこに行ってしまったのか、と。異国の王の暴力に屈せざるを得ない現実と神の義を疑うこともできない保守派のユダヤ人は、死後における「義人」への報いというエノク派の考えを取り入れ、「復活」思想を明確にすることでこの神義論に答えた(ダニ12章、1エノク90章)。「そのとき、大いなる守護天使ミカエルが現れる、あなたの民の子らの側に立つ者として。国が始まって以来そのときまでなかったような苦難の時が来る。そのとき、かの書物に記されているあなたの民は皆助かる。大地の塵に埋もれて眠る者の中の多くの者が目覚める。ある者は永遠の生命に、ある者はいまわしい永遠の咎めに。見識ある者たちは蒼穹の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者たちは星のように永久に「輝く」。(ダニ12の1～3[岩波訳])

ここではユダヤ教弾圧という未曾有の事態ゆえに終末が間近に迫っているものと捉えられており、終末までの死後の靈魂の運命については語られていない。また、全人類の復活が考えられてはいないようで(「多くの者」)律法のために処刑された者は復活して「永遠の生命」を得、この世の生命のために律法を棄てた者は永遠の咎めのために復活させられる。復活に際して肉体を伴うかどうかは明確でない。「大地の塵」からの目覚めは肉を思わせるが、「蒼穹」や「星」のように「輝く」は靈魂の復活をイメージさせる(1エノク104章参照)。

ダニエル書では不明確であるが、肉の復活という思想はやはりこの時代に生まれたもののようで、第2マカバイ記7章には処刑によって失われた肉体が神から再びもらえるという信仰が明言されている(1エノク90章参照)。

「復活」思想の全人類への一般化

この時代の復活思想は、殉教者の復活・永生と棄教者の復活・裁きが考えられているが、ローマ時代(前1世紀～)になるとそれが一般化される。

「罪人は永遠に滅び、主が義人に目を注ぐときにも憶いだしてもらえないだろう。それが罪人らの永遠の分けまえだ。しかし主を畏れる者たちは永生へ甦り、彼らの命は主の光のうちにあり、もはや絶えることはないだろう。」(ソロモンの詩篇3の11～12)⁽³⁾

終末時の審判の日に、「義人」は復活して永遠の生命を得ることが報酬とされ、「罪人」は復活できず、冥府に落とされる。ここで肉体の復活が考えられているかどうかは不明である。さらに後1世紀に入ると、終末時の裁きが全人類に及ぶことが明確にされるとともに強調され、それに応じて全人類の復活、肉体の復活が明言されるようになる。「義人」は楽園に、「罪人」は地獄に落とされる(1エノク37～71章、偽フィロン、4エズラ、2バル

ク)。肉の復活と永遠の生命を調和させるため、復活後の肉体の変貌にも言及される。罪人たちの姿は「彼らが拷問に耐えられるように、今よりもっと悪く」なり、義人たちは、その顔が変化して輝き、「彼らの顔形は彼らの栄えの光に照らされて変わり、彼らに約束されたところの死することなき世界をわがものとして受けとることができるようになる」と(2バルク51の2～3、1エノク51の4、マコ12の25参照)。第4エズラ書では終末後の運命だけでなく、そこに至るまでの死者の靈魂の運命についても描写されている。それによると、人は死ぬと霊が肉体から離れるのだが、罪人の霊は、義人の報いを見、自らの責め苦しむ7つの道を通って、嘆き悲しみながらさまようものとなる。義人の霊は、7日間、罪人の魂がさまようのを見たり、自分が受ける栄光を見、顔が太陽のように輝き、星の光に似、神の顔を見に行ったりという7つの段階を経て、天使に守られ、大いなる静けさのうちに安らうことのできる「倉」に集められ、終末の時を待つという(7の75～101、ルカ16の19～31、23の43、フィリ1の23参照)。

「義人」「罪人」二分と自己義認の正当化

以上のことから、古代ユダヤ思想史における復活思想の成立と発展には3つの段階があったと言える。まず、前3世紀のエノク派が死後の靈魂の運命と終末論についての思弁を展開し、それが前2世紀のユダヤ教弾圧によって「復活」思想として結実した。そして前1世紀のローマ支配がユダヤ人の反異民族感情を高め、終末時の裁きと報いの範囲を全人類に拡大させるに至った。いわゆる「最後の審判」のイメージ。肉体の復活を伴う永遠の刑罰と永遠の生命への人類の二分化が確立されたのは後1世紀と言える。

ユダヤ教における復活思想の特徴は、常に終末論と結合しているという点に認められる。それは死への恐怖やこの世の生をより充実させるためといった動機から死後の運命についての思弁が展開された結果ではない。すでに述べたように、もともとヘブライ語聖書には個々人の死後の運命についての関心は薄い。民の一体性が自覚されている限り、個人の死は問題とならないのである。民に亀裂が生じた結果、この世の生に不満を抱えたセクト(分派)に終末論的な運命の逆転という希望が生じ、その亀裂がユダヤ教弾圧という形で顕在化したときに生まれたのが復活への希望である。それはルサンチマンの表現でしかない。それゆえ復活と永遠の生命への希望は、常に他者の裁きの希望と対になっているのである。

復活思想がローマ時代に一般化されると、このルサンチマンはさらに屈折していく。復活思想が全人類に拡大されたのは異民族支配という現実に対するユダヤ民族主義的抵抗であったが、同時にまたローマの傀儡と化したユダヤ人指導者の存在(ヘロデ家および時の政権に任命される大祭司たち)は、民の一体性をさらに瓦解させた。それゆえユダヤ人であっても「罪人」とされた者は、もともと「罪人」たる異民族とともに裁かれることになる。このような復活思想を喧伝する者は、対外的には異民族

(ローマ)に対するルサンチマンによる自己満足、対内的には自分を「義人」に位置づける自己満足を得ることになる。結局のところ、後1世紀ユダヤ教における復活思想とは、人間を「義人」と「罪人」に二分し、自らを「義人」の側に組み込むことで自己義認することを正当化する神学なのである⁽⁴⁾。

2 キリスト教における「復活」と「永遠の生命」への希望

キリスト教はユダヤ教の1セクトであるからその復活思想も後1世紀のユダヤ教のそれと本質的に変わることはない。異なるのは人間を二分する基準である。ユダヤ教は律法遵守を基準とするが、キリスト教はキリストへの信仰を基準とする。しかし、一つの価値観で人間を二分し、自らを「義人」とし他者を「罪人」として断罪する有り様になんら変わりはない⁽⁵⁾。ローマ帝国に公認された4世紀以降のキリスト教はもはや復活信仰を生み出したルサンチマンを必要としなくなったはずだが、それにもかかわらず、人間を救済論において二分する「信仰」は今なお根強い。現代ではそれを克服する様々な試みがなされつつあるが、キリスト信徒個人が永遠の生命を求めると自体は必ずしも否定されなくてよいかもしれないが、その希望が他者(非信徒)の断罪と滅びを内包しているとするならば、そして教義的にはそうなるのだが、そのような希望はエゴイズムの一形態と呼ぶ他はない⁽⁶⁾。

3 「永遠の生命」・大いなるいのち

「復活」の希望とは「永遠の生命」を得ることの希望であるが、その「生命」とは「私の生命」のことである。「生命」というものが一人一人に与えられており、その中で他の人のものとは区別された「私の生命」が永続することの希望である。確かに「生命」は一人に一つずつ、肉体と共に与えられている。人はだれしも一人の人間として生まれ、一人で死んでいく。その誕生から死までの間にあるのが「生命」である。だからそれは確かに「私の生命」ではある。けれども、そのいのちは本当に「私の」ものなのだろうか。

人は自覚的に生まれることはできない。生まれた後で自分の存在に気づくのである。死んだ後には当然ながら自己の存在を自覚できない。自分が「私」であるという自意識を「自我」(エゴ)と呼びうるが、この自我がそうと認識しているものが「私の生命」である。しかし、実際には人は独りで生きることはできない。親に生んでもらわなければ「私」は存在しないし、生まれた後もありとあらゆる他者のいのちによって生かされている。人は他者のいのちを奪うことによつてのみ生きる。それは動植物を食すということだけでなく、人はありとあらゆる他者とのかかわり合いの中でしか生きられないから、ありとあらゆる他者のいのちの一部をいただきながら生きているのである。とはすなわち、いのちとは関係の中で生かされて在るものなのだ。そして「私のいのち」もまた関係のなかであって他者を生かしているのである。いのちはありとあらゆる存在が互いに生

かされ生かし合う関係のなかであり、「私のいのち」はその大いなるいのちの一部である。大いなるいのちは人類誕生のはるか昔からあり、それが関係をとおして今日に至る私たちのいのちをもたらしめている。そしてこれからも。一度生じた関係は消し去ることはできない。無かったことにはできない。ならばいのちは永久なるものなのだ。

人は必ず死ぬ。それは「私の生命」の死である。けれども「私の生命」とは自我が「私のもの」と自覚している限りのものであるから、「私の生命」の死、肉体の死とは、実は「自我」(エゴ)の死に過ぎない。「私の生命」が永続することを願う「永遠の生命」の希望とは、自我の永続の願いなのであり、それはまさにエゴイズムの表現なのだ。しかもキリスト教の場合は非信徒の滅びを前提とした上にこの希望がある。その人たちも「私」を生かしてくれているいのちであるはずなのに。それは剥き出しのエゴイズムであり、暴力であると言わねばならない。

確かに「死」はなにほどこ怖ろしいものではあるが、死がなければ生きるということもない。自我が「私の生命」を自覚しその死を怖れるから、人は危険から身を守ろうとするし、また主体的に生きようとする。しかし、この自我に執着しエゴイズム(我執)に陥るならば、他者のいのちを損なうことになるし、それは結局のところ「私のいのち」をも失ってしまう。「私のいのち」はもともと大いなるいのちの一部なのであって、「私の生命」が死んでもなおそのなかであり続けるのだと思う。私たちは大いなるいのちからほんの一時「私の生命」を自覚する機会、自我を与えられ、そしてまたそこへ還るのである。私たちが「私の生命」を生きている間になすべきことは、自我の死後を思い煩うことではなく、大いなるいのちの一部として、いのちのために与えられた「生命」を生ききることはなかるうか。

注

- (1) 古代ユダヤ教における死後の運命に関する思弁については、拙論「古代パレスチナ・ユダヤ教における死後の世界と終末論」細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯・下巻』リトン、2006年、139-175頁参照。
- (2) レビ19の31、20の6、27、申18の10-11。レビ19の27-28、21の5、申14の1、26の14も参照。
- (3) 9の5、13の11、14の3-10、15の10-13参照。邦訳は後藤光一郎「ソロモンの詩篇」日本聖書学研究所編『聖書外典偽典5』教文館、1976年、13-65頁。
- (4) 後1世紀のユダヤ思想の状態については、拙論「後1世紀パレスチナの空気」『新約学研究』35号(2007)5-30頁参照。
- (5) キリスト教のセクト的性格およびそれにまつわる諸問題については、拙著『キリスト教信仰の成立 ユダヤ教からの分離とその諸問題』関東神学ゼミナール、2007年参照。
- (6) キリスト教の「復活信仰」という場合イエス復活の信仰がその基盤にあるが、それについては紙幅の都合上本稿では触れられない。拙著、同上、16-18頁参照。

*本稿は『福音と世界』4月号(2008年)12-17頁に掲載された拙稿をそのまま転載したものである。転載をご快諾いただいた新教出版社に謝意を表したい。

(うえむら・しずか、大学講師・団友)

カンタータ第 169 番《神にのみ わが心献げん》
»Gott soll allein mein Herze haben« BWV169

原詞：作者不詳 訳詞：大村恵美子

1. シンフォニア

2. アリアとレチタティーヴォ (アルト)

神にのみ わが 心 献げん

世の 誘(いざな)い
価(あたい)なき ものを
われに 崇めさせ
言いよりて
わが 友を 装う
されど

神にのみ 心 献げん
主にこそ 宝を 見いださん

ここ かしこには
主より 出ずる
喜び あり
主は 恵みの 泉
溢れいずる 大いなる 源(みなもと)
つねに 汲めども 尽きせぬ
生命(いのち)に 満つ

神にのみ わが 心 献げん

3. アリア (アルト)

神にのみ わが 心 献げん
主にこそ 宝を 見いださん
 悪しき 世にも われを 愛し
 かしこにては 主の 家に
 われを 憩わせたもう

4. レチタティーヴォ (アルト)

神の 愛とは
心と
魂(たま)の 憩う
楽園なり
黄泉(よみ)を 閉ざし
み国を 開く
エリヤの 車
み国に 導き
安きを たもう

(列王記下 2:11)

5. アリア (アルト)

さらば
わが 内なる 世の すべての 愉しみよ
わが 胸
地にて 主の 愛を
たゆまず 学ばん ため

さらば

驕り 高ぶりよ、忌まわしき 肉の 念い
世の すべての 愉しみ

6. レチタティーヴォ (アルト)

されど 忘るな
主の み言葉
神と 隣人(となりびと)を 愛せよと
記(しる)さる

7. コラール

主の 愛よ われらにも
熱き 思い たまえ
たがいに 愛し 一つなる ところに
平和を たまえ
キリエ エレイソン

(Martin Luther „Nun bitten wir den Heiligen Geist“ 1524 第 3 節)

解説

橋本 眞行

初演:1726 年 10 月 20 日(三位一体節後第 18 日曜日),
ライブツィヒ.

編成:アルト独唱, 4 声部合唱, ターユ(現在の楽器
ではイングリッシュホルン), オーボエ・ダモーレ, オル
ガンと弦楽合奏, 通奏低音.

バッハのアルト・ソロのためのカンタータは 4 曲が残
されており, ヴァイマル時代の 1 曲(BWV54)を除く 3
曲(BWV35, 169, 170)は, 1726 年(バッハ 41 歳, ライ
プツィヒ・トーマス教会カントル就任 4 年目)に作曲さ
れた. アルトのソロカンタータが集中して書かれたこと
から, このころに優秀なアルト歌手(おそらくカストラ
ート)がライブツィヒにいたであろうと想像される. ま
た, これらの曲ではオルガンがオブリガートに用いられ
ているが, 16 歳になった長男 W. フリーデマンに公けで
の演奏に参加させ, 実地教育を施そうとしたためと考え
られている. この BWV169 では, 現在では失われたオー
ボエ協奏曲がオルガン協奏曲に編曲され, その第 1, 2 楽
章が, このカンタータの第 1, 5 曲に用いられている. この
オルガン協奏曲は後にチェンバロ協奏曲(第 2 番変ホ長
調 BWV1053)として再度編曲され, 今日に残っている.

歌詞テキストは, この日曜日(三位一体節後第 18 日曜
日)に朗読される「マタイ福音書」22 章 34 - 46 節に基
づいて, 主の愛と隣人への愛がテーマとなっている. 不
詳の台本作者は, 聖書の「汝は主を愛すべし Du sollst
lieben Gott」(37 節)という表現を, 「主はただわが心
のみをとりたもう Gott soll allein mein Herze haben」
のように, 主客を逆転させた表現方法で主への愛を説き
(歌唱訳は《神にのみ わが心献げん》), さらに, 驕り・
富・目の欲など, わが身に巢食うすべての世の愉しみと
訣別し, ひたすら主の愛に学ぶことを諭し, 最後に主へ

笠原芳光著『日本人のイエス観』

大村 恵美子

最近ご恵贈いただいた著書のなかから1冊だけ、紹介させていただくことにする。この本は、同じ題で1981年から1996年まで、春秋社の雑誌「春秋」に連載されたものに、内容を新しく加えて再編成し、教文館から単行本として出されたものとのことである(2007年12月、初版)。

著者の笠原芳光氏は、1950年代(私の高校-大学時代)以来の畏友であるが、いまでもずっと合唱団月報をお送りしつづけて、折々にご感想をうかがったり、神戸から上京されたときにお会いしたりして、こちらでは気安く私を理解してくださるお一人だと思わせていただいている。

序・総説について、文学(遠藤周作、塚本邦雄、武田泰淳、椎名麟三、太宰治、山岸外史、石川淳、芥川龍之介、武者小路実篤、山村暮鳥、上田敏)、思想・歴史(吉本隆明、赤岩栄、幸徳秋水、住谷天来、渡瀬常吉、山路愛山、内村鑑三、植村正久、田島象二、新井奥邃)の二つに分けて、主として明治以降の日本人21人のイエス観を紹介・批判しておられる。これを一読して、私は、キリスト教布教率が50%を超えているとされる韓国などはちがって、いまだに0.9%と微々たる日本のなかで、開国後の短い間にこれだけ多くの人たちが、生涯を賭してイエスを追求した、その壮観にまず驚いている。その追求のゆえに救いを得、幸福を得たもの、迫害されたもの、死に追いやられたもの、その他、さまざまな結末である。

私は、笠原氏ご自身のイエス観を、結論としてはっきり知ろうとは思わない。私自身としても、これらの生き方のなかに何らかの基準をさしはさんで、黑白をわかち、自分の指標にすることができようとは思わない。イエスを追求することによって、それでは何が達成できると考えるのだろうか。私は、この人生において、「想像力」こそ最大の賜物と信じている。ひとつのことにに関して、反応する人間の態度は、まったく多様である。イエスに関わったことから、生命を落とす人、それも苦悩のうちに、もあれば、至福のうちに、もあろう、安寧と健康を得たのしい人生を貫く人、その他、千差万別の人生が展開されよう。それもこれも、みんな、各自の想像力のはたらく結果だと思う。

神を愛せよ、おのれを愛せよ、他者を愛せよ。どれ一つとっても、明証できるものはなく、失敗感も達成感も、自身のもち合わせ、はぐくんできた想像力のみちびく結果である。赤ん坊が生まれて、母親を独占し、兄弟とそれを相い争い、友だちとおもちゃで遊ぶ、または奪い合う……、生まれたその日から、気の休まることはない。これを、自分も他人も生かせるように捌いて生きつづけ

の愛の延長線上にあるものとして隣人への愛に言及している。

第1曲シンフォニアに続く第2曲では、アリオゾで3度にわたり 神にのみ わが心献げん と主題を詠唱し、そのたびごとにレチタティーヴォで注釈をおこなって、この世の否定と 宝 としての神の愛を語る。第3曲アリアでは、神の愛への憧れを感じさせるオブリガートオルガンをともなって、温かくも雄弁な通奏低音とアルトとのしっとりした会話により、第2曲と同じ主題を語り継ぐ。第4曲レチタティーヴォでは神の愛の何たるかが語られ、第5曲では、そのような神の愛に住まうためこの世のすべての愉しみとの訣別を誓う。シチリアーノのリズムに乗せて転調を多用することにより、この世の愉しみが意味のない虚ろなものとして描かれている。途中で さらば と歌う下降音形や、肉の念い などでの音の使い方が絶妙で、何度もはっとさせられる。隣人への愛に言及する第6曲の後、第7曲(終曲)にはルターの聖霊降臨節のためのコラール(1524年)が置かれ、古雅で静かな祈りのうちに曲を終える。

後援会員・団友の皆様

第102回定期演奏会のご案内

次回公演は、いよいよ来月に迫りました。「嵐から光の日々へ」という構成で配置された、4曲のコンタータ。いずれもバッハの力作ぞろいです。練習も、目下、混沌から熟成の日々へ、と進んでいます。どうぞ、お楽しみに。

さて、すでに皆さまのお手許に「御招待状」をお届けいたしました。ご多忙中とは存じますが、お知り合いの方々もお誘い合わせで、是非ともご来場いただきたく、ご案内いたします。ご同伴の方のチケットは、事務局までお申し込みください。

コンタータ第102番《主の目は 信仰を見たもう》
 コンタータ第67番《留めよ心に 主イエスを》
 コンタータ第169番《神にのみ わが心献げん》
 コンタータ第182番《天(あま)つ君を 喜び迎えん》

2008年6月21日(土)午後2時開演
 めぐるパーシモンホール
 (東急東横線「都立大学駅」下車、徒歩7分)

アルト:佐々木まり子、テノール:鏡 貴之、バス:河野克典
 オーケストラ:東京コンタータ室内管弦楽団
 オルガン:筒井淳子、合唱:東京バッハ合唱団
 指揮:橋本眞行(BWV102, 67)
 大村恵美子(BWV169, 182)

入場券:3000円(全席自由、当日券あり)
 事務局

03-3290-5731、FAX 03-3290-5732、bachchortokyo@aol.com

ること、これは死ぬまでつづく。厳しく教えられたり、外からの制裁で抑えられたりしなくても、各自の想像力をのばし、育てることで、衝突をなるべく避け、事前の賢明な処置で、できるだけ自由に生きられないものか。

そのときに、「イエス」の生き方が、多くの謎のなかから、何か光明を投げかけてくれる、と感じる人が、そのイエスを追求してゆくのである。その多様な追求ぶりを知って、はあ、そうか、と共鳴したり、反発したりしながら、自分なりの道をたどってみる。

知ること、経験すること、みんな役に立つ。しかし、自分の納得しえないことまで、教規・教則のように、教えられて遵守することは、あまり幸せな成果に結びつかない。うまく行かないこと、行くこと、縊りあわせて豊かな人生がつくられる。そうゆったり構えることが、年を追うごとに強くなってきた。若いときのように、これが正しいのに、障碍のために進められないのなら、いさぎよく死ぬべきでないか、などと、短絡することはだんだんなくなってくる。ああ、みんな、いろんな想像力に支えられて、色とりどりのことを展開するものだなあ、と、自分を含めたことがらまで、ひとごとのように興味深く、味わうことができるようになるのも、長寿の功德か。そんなふうに、人生を見るのが幸せのもとしてあり、何ごとにつけ結論を急ぐのは誤りだと思える。人とのつきあいも、また自分自身とのつきあいも、そうではないでしょうか。決して不まじめに言っているのではないのですが、笠原様、いかがでしょうか。

結論とは言えないでしょうが、ときどき笠原様が使っておられる、「イエスは心の底を流れる地下水」というような表現を、私は実感として生きています。

楽譜新刊のご案内

バッハ教会カンタータ [日本語訳詞つき] 楽譜シリーズ

< 5月新刊 >

カンタータ第75番 (貧しきものは食し) 1800円
カンタータ第122番 (新たのみどりご わがイエスは) 1300円
カンタータ第191番 (グローリヤ 高き天なる神に) 1800円
カンタータ第214番 (太鼓よ鳴れ ラッパよ響け) 2000円
…以上4曲、第103回定期演奏会(次々回、本年12月)使用楽譜。BWV214は世俗カンタータ。

< 「カンタータ50曲選」 完結後の既刊楽譜 >

カンタータ第67番 (留めよ心に 主イエスを) 1400円
カンタータ第102番 (主の目は 信仰を見たもう) 1500円
カンタータ第169番 (神にのみ わが心献げん) 1300円
カンタータ第182番 (あまつ君を 喜び迎えん) 1600円
…以上4曲、第102回定期(次回、本年6月21日)使用楽譜
カンタータ第52番 (悪しきこの世よ なれを頼まじ) 1200円
…ソプラノ独唱用、第104回定期(2009年5月)使用楽譜
カンタータ第65番 (もろびと シバより来たり) 1500円
…第101回定期(2007年12月)使用楽譜

価格は、いずれも団内・団関係者特価。お申し込みいただき次第、郵便振替用紙を同封にて、お送りいたします。

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 14>

カンタータ第 80 番 (かたき皆ぞ わが主は)

最近バッハの《平均律クラヴィア曲集》や《インベンションとシンフォニア》などにどっぷりとはまっていた。それには訳がある。テレビなどに出演している脳科学者の茂木健一郎氏が著書の中で、文章を書くときなど、気持ちを集中したいときに流す曲に《平均律》を挙げていたからだ。単純な私は「そうか」と思い、朝一番、家を出るや手軽に音楽の楽しめる端末でピアノ曲を徹底的に聴き続けていた。たしかに気持ちが何かに真剣に向く気がするではないか。いや、でもこれは、バッハの曲全体にいえることかもしれないと思い直している。

さて、今日ご紹介するのは、バッハのカンタータを代表する名作で、讃美歌でも馴染み(「神はわがやぐら わが強き盾」267番、『讃美歌21』377番)のコラールが登場するカンタータ第80番である。つい口ずさみたくなるようなこのコラールは、宗教改革者ルターが作詞作曲したもので、バッハのカンタータは、このコラールの第1節から4節まですべてを土台にして構成されている(1節 第1曲合唱、2節 第2曲SB二重唱、3節 第5曲SATB斉唱、4節 第8曲コラール)。冒頭、合唱のテノール声部によって勢いよく主題に飛び込み、つぎつぎに各パートが加わってくるあたり、「これぞバッハ!」といった感じで曲に引き込まれてしまう。

最近出版された『バッハのコラールを歌う』(川端純四郎編著、キリスト新聞社刊)で、このルターのコラールが「勝利の歌」としてよりも、「慰めの歌」として解釈されていることが紹介されていた。「たしかにこれは戦闘の歌です。しかし、私が勝利するのではなく、私の国が栄えるのでもありません。ただ神の国だけが存続し、そこに入る者は、キリストと共に十字架を負う者だけなのです。このような深い理解に達したのは、ドイツ軍の進軍歌として歌われた歴史への反省があるからだそう。そこで現在では「勝利」のモチーフではなく、「慰め」として受け止められ、「この世“で”勝つのではなく、この世“に”勝つ」神への信仰を堅くするルターの心がこめられていることを知った。

バッハはこのコラールの深みを噛みしめていたにちがいない。最終曲のコラールまで、だれでも、一気に聞き入ってしまうことは必至である。最近ピアノ曲ばかりを聴いていた私であったが、カンタータに触れて「魂の故郷」に帰ってきたような不思議な気持ちに包まれている。

(やなぎもと・ひろし、東京神学大学大学院・団員：バス)

CDバッハ・カンタータ50曲選[第11巻]に収録。S名古屋木実、A戸田敏子、T佐伯雅巳、B宇佐美桂一、大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団、東京カンタータ室内管弦楽団。1983年録音(第53回定期演奏会・石橋メモリアルホール)。

楽譜：東京バッハ合唱団/ブライトコプフ「50曲選」No.27